

養育のボタンを受け取って

養育里親さん
体験談



里親登録の動機

「里親制度」について知る機会があり、社会貢献できたらいいなと思ったことがきっかけでした。

里親として子どもを受託するにあたって

自分達に何かあっても兄弟がいれば寂しくないかなと思い、複数での受け入れを希望していました。すると、ある日児童相談所から「兄・妹のきょうだいを受け入れてもらえないか」と言う連絡がありました。家族で相談し、受け入れを決めました。



受託当時

受け入れ当時、兄は2歳、妹は1歳でした。里親養育は成長の途中からの養育で、2人も乳児院での生活を経て我が家に来ました。乳児院から2人を預かるときに「ボタンをつなぎます」と言われたことを今でも鮮明に覚えていて、重責を感じると共に「自分達が守っていく」と強く思いました。

生活が始まって

我が家に来たばかりの頃は、兄は私たちに適応しようと小さいながらに一生懸命頑張っており、妹は不安でいっぱいなように感じました。まだ話すことのできなかつた2人は泣く事で自分を表現していたので、何とか思いをくみとろうと、私たちも一生懸命でした。

そうしているうちに、少しずつ泣くことが減り、笑顔が増えてきて、落ち着いてきたように感じました。はじめは「あーうー」だけだった言葉も、少しずつ話しができるようになり、いろんなことを説明できるようになりました。子どもが話せるようになると、家庭内の会話もますます増え、家庭内が明るくなりました。



近所や地域との繋がり

急に2人も子どもがきたらご近所さんもビックリするかなと思い、受託してすぐに兄妹も一緒に「よろしくお願ひします」と挨拶まわりをしました。保育園にも通うことになり、今まで関わりのなかった社会ともつながりができました。妻の実家の両親にもとても可愛がってもらっており、地元のお祭りにも参加しています。

現在の生活と、ささやかな喜び

受託から4年経ち、普段は保育園に通いながら、我が家にある畑で自然と触れ合っただのびのびした生活ができているかなと思います。また、いろいろな経験をしてほしいなと思っていて、クリスマスにはサンタさんが来るなど、季節の行事を通した思い出作りや、旅行にも行く機会も増えました。毎日の生活の中で、子どもたちが自分達を頼って笑顔になってくれることや、小さな成長が日々の癒しとなり、喜びとなっています。

「子どもが3歳になるまでに、親は他に代えがたいものを得ている」という話を聞いたことがありますが、まさしく今、子どもがかわいい時に関わることができた幸せを実感しています。楽しいことの反面、子どもの成長と共に心配事も増え、悩み事もつきませんが、子どもを一人の人間として尊重し、やりたいことが出来るように環境を整え、見守っていきたいと思っています。



幸せのすりこみ

日頃から意識して「幸せのすりこみ」をしています。「2人のおかげでこんなに幸せなんだよ～」とハッピーオーラを全開に、幸せの貯金が少しずつたまってほしいなと思っています。里親養育は、期間限定の養育かもしれませんが、何気ない生活は豊かでかけがえのないものだと感じています。

これからも何気ない生活を大切に、子どもと一緒にそれぞれの人生を紡いでいきたいと思っています。

